

巻頭言

## 症例報告のすすめ

杏林大学医学部眼科学教室 平形明人

情報技術の急速な進歩で、日常生活でどこにいても短時間に世界中の多くの情報を交換できるようになりました。研究活動においても、文献検索ばかりでなく、多施設の研究者と実験結果を共有したり、画像結果まで容易に供覧しあうことができます。論文を書くためにも、文献検索は非常に楽になり、写真や表の作成、結果の統計処理なども便利です。そして、論文が書きやすくなって数も増加し、客観評価がしやすい業績であるために、論文数やIFを競ったり、評価の高い論文として扱われる多施設多数例の検討報告を症例報告よりも重んじる傾向もみられてきました。

一方で、最近では論文不正も話題になっています。特に研究論文では、迅速化を重要視しすぎて、論文作成が拙速となる傾向がみられるのも不正が生じやすい一因と思われます。このことは、松村譲児教授が杏林医学誌44巻の巻頭言で示唆しています。著者自身が意図的に捏造した悪意のある内容をもってのほかですが、多施設の共同研究者間の意思疎通が不十分で、なかには画像結果の編集や統計処理などの過程で生じた共同研究者の誤った実験手技や誤記に気づかず、何が不正であったのかも著者自身が理解できないこともあるようです。不正論文はその研究分野の遅延にも繋がります。そして、その予防には研究者一人一人の高い倫理性と科学的思考の質の向上が求められます。

コンピュータで他文献からの引用や画像処理や結果改ざんなどが容易にできる時代に、どのようにして信頼ある研究者あるいは医師を養成するかは重要な課題です。対策として、論文審査や業績評価法の見直しや倫理教育も大切です。そのなかで、症例報告を正しく書く習慣を身につけることも適切な論文を書く訓練として重要だと思います。

論文は、新しい発見や発明を「人にわかりやすく適切に伝える」のが目的です。緒言、目的、方法、結果、考察、要約などの各項目を適切に記すためには、研究目的を明確にして、必要にして十分な信頼できる方法で結果を求め、過去の報告と比較検討してどの点が発見なのかを論理的に組み立てることが必要です。それを行うことで論理的な思考過程の習慣がなされます。医師にとっては、この習慣が、日常の医療行為の難病に対するときの課題解決にも役立ちます。そして、論文としての基本的な論理的組み立てや記述形式は、論文よりも書きやすい症例報告にも共通しています。

症例報告を行うためには、その症例の課題を的確に整理して、最善の診断と治療を行う必要があります。そのために、その疾患についての知識や過去の報告との共通点や異なる点に関して、ていねいに文献を読みながら検討しなければなりません。この課題に対する論理的な組み立て方は科学研究や論文作成と同じです。症例報告を大切にする姿勢は、医師としての成長も促します。論文が比較的容易に書けるようになってきた現代において、日本語よりも英語論文、症例報告よりも多施設多数例の報告が重要視されていますが、信頼できる論文を作成する訓練のためには、母国語である日本語で表現したり、症例報告を繰り返し行う習慣を身につけることも大切です。特に若い医師や研究者は、一例一例を大切に検討する症例報告を積極的に行っていただきたいと思います。